

言語、民族的にも多様で、約1億人の少数民族が暮らす山地社会をひとつの「地域」として捉えることの意義は、国民国家単位で世界を理解する一般的な知のあり方だけでなく、米国の政策科学としてはじまった地域研究が暗黙の前提としてきた地域概念も見直す契機になっている。

スコットは「ゾミア」に生きる人々を「これまでの2000年のあいだ、奴隷、徴兵、強制労働、伝染病、戦争といった平地での国家建設事業に伴う抑圧から逃れてきた逃亡者、避難民、マルーン共同体の人々」と定義し、その生業、社会組織、イデオロギー、そして口承文化さえも、国家から距離を置くために選ばれた戦略と主張した[同上書：ix-x]。これまで国民国家における少数民族として、貧困や人権侵害の被害者として、そして紛争から逃れてきた難民として理解されてきた山岳民族について、様々な背景を持つ人々から構成された、国家の支配から自由を求めて逃れてきた人々という新たな理解を提示している。

こうしたスコットのゾミア論と、ビルマ・タイ国境の難民問題を関連づけてみれば、当該地域の人びとの民族的アイデンティティよりも、その「生業のエートス」[松井 2011]に注目してみたい。松井はアフガニスタン東北部のパシュトゥーン遊牧民の長年の研究から、生業を生活物質の生産という限定的活動としてだけとらえるのではなく、生業自体が文化的な領分であることを示す「生業のエートス」という概念を提唱した[同上書]。タイ・ビルマ国境地域の物質的生態的条件から導かれる人びとの生業のあり方はいかなるものであったのか。スコットも同地域の焼畑耕作と栽培作物の選択について、移動性が容易な生業であるという観点から考察している。国家による統治、ビルマ軍の侵略と移動、難民キャンプでの定着によって失われた彼らの生活様式、知識とテクノロジーはいかなるものであったか。そしてタイ、ビルマ、そして第三国における定住が求められるなかで、彼らはどのような生活様式を再生するのか。

著者の当初の関心は、カヤンの観光村訪問からはじまり、難民キャンプの生活世界からはじまった。その後、難民キャンプを出て米国での定住を選択する人びと、また将来的なビルマへの帰還を

想定し、複数の国、地域におけるフィールドワークを継続している。こうしたカレンニー難民の現在をめぐるマルチ・サイト的なフィールドワークに、当該社会の地理・生態学的環境、生業と生活様式を視野に入れた、山地民の歴史と現在に関する研究者として、著者の今後に大いに期待したい。

(福武慎太郎・上智大学総合グローバル学部)

### 参考文献

- Malkki, Liisa H. 1995. Refugees and Exile: From “Refugee Studies” to the National Order of Things. *Annual Review of Anthropology* 24: 495-523.
- 松井 健. 2011. 『西南アジアの砂漠文化——生業のエートスから争乱の現在へ』京都：人文書院.
- スコット, ジェームズ・C. 2013. 『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁(監訳). 東京：みすず書房. (原著 Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.)
- トンチャイ・ウィニッチャクン. 2003. 『地図がくったタイ——国民国家誕生の歴史』石井米雄(訳). 東京：明石書店. (原著 Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*. Honolulu: University of Hawai'i Press.)

富田江里子. 『フィリピンの小さな産院から』石風社, 2013, 288p.

### フィールドワークのような読書体験

『フィリピンの小さな産院から』というシンプルで可愛らしいタイトルが付けられた本書には、フィリピンのお産をめぐる衝撃的な現実が綴られている。

助産師である著者は、家族で移り住んだフィリピン・サンバレス州・マンガハン再定住地に小さ

なマタニティ・クリニックを開くことになった。現地で暮らすうちに、お産を通じて多くの母子が死亡している話を耳にし、また友人達の死産を目の当たりにしたからだ。彼女のクリニックには妊産婦だけでなく他の多様な症状を持つ患者もやってくる。彼らのほとんどは貧困層の人びとであり、病院で治療が受けられなかったり、医師や看護師から差別されたりした経験を持つものも多い。著者は活動が続ける中で様々な境遇にある患者と関わり、価値観や習慣の違い、フィリピンの医療制度や社会の歪みと向き合ってきた。その経験を記したエッセイが2002年から『助産雑誌』に連載され、それらをまとめたのが本書である。4つのテーマで章が生まれ、それぞれ複数のエッセイが収録されている。

本書について正直に告白すると、評者は読み続けるのが辛くなることが何度もあった。それは、著者の描く一人一人の産婦の生き方を通して、読み手にダイレクトに彼女らの痛みが伝わるためだろう。加えて、分娩中の赤ちゃんの死、中絶、子どもの売り買い、育児放棄といったテーマがタブー視されることなく扱われている。また病状や処置に関する描写は生々しく、その場を想像するだけで血の気が引いていく思いがした。

そのように冒頭部ではショックを受けるばかりであったのが、少しずつ読み進めるうちに、著者が現地の人びとと共に喜んだり悲しんだり、彼らの行動に苛立ったり感心したりする過程を追体験しているような感覚を抱くようになった。その感情の移り変わりは、評者が長期フィールドワークを行った際に、遠く隔たったところにあった人びとや理解に苦しむ出来事との距離が徐々に近くなっていった経験と重なった。

本書はフィリピンの貧困層に寄り添ったお産介助の実践報告でありながら、現地社会の「リアリティ」の重みと鮮やかさを伝えるエスノグラフィーとして読むこともできる。フィリピン社会の暖かさとしき辛さ、人間の生命力と矛盾が詰まった濃厚な一冊である。本書を手にとった方がそれぞれ素敵な読書体験をされることを願って、以下いくつかの論点に沿って本書の内容と魅力について紹介する。

## 「光と闇」が凝縮された現場

著者曰く「ここは人と人の距離がとても近い」(p.2)。当然お産も、家族・親族から近隣の友人、中にはたまたま居合わせた他人まで、たくさんの人に囲まれお節介を焼かれながら進んでいく。本書には自宅出産の事例がいくつも登場するが、ドタバタの様子が目に浮かんで思わず微笑んでしまった文章を引用してみたい。

到着するともうすぐ生まれる状態だった。皆何かそわそわ落ち着かない。「便を捨てるビニールある？」と聞くと、家のなかにいる女性陣全てが一斉にビニールを探す。エンジェルの背中を支えていた母親まで、ビニールを探しに行くので私は止めるのに必死だった。その後は、次々にビニール袋が届き私は苦笑するしかなかった。(中略) こういうお産は幸せだ。たとえ役に立たない行動でも、皆が産婦と赤ちゃんのために何かしたいと考えるエネルギーはあたたかく循環する。自宅出産が順調に進むのは、こうした精神的リラクセスが大きいのだと思う。(pp.64-65)

管理出産が当たり前となった日本では、病院で医師や助産師の処置を受けなければ安全なお産ができないと思いがちである。一方現地では、産婦が最もリラックスできる環境で「自分の力で生む」お産が実践されている(実践せざるを得ない状況でもある)。彼らにとってお産は、人との繋がりや生命力がこの上なく発揮される場である。著者は、多くの母子が特別な支援を受けずに家庭出産し、子どもが元気に育っていくのを経験し、そこに親子の愛情と生きる力が自然に育まれるお産のあり方を見出している。

多くの新たな命は、このように愛情と希望をもって迎えられる。しかし、妊娠と出産は時に、身体的・精神的・経済的負担となって産婦に重く押し掛かる。本書には、貧困を中心とした悪循環の中で辛い経験を強いられる人びとの姿も描かれている。例えば、著者のクリニックの周りで売春をして生きる女性の中には、何度も妊娠・出産し、

そのたびに里子に出さざるを得ない人達がいる。場末になるほど避妊を求めると客が見つからない、子どもを連れては仕事ができないといった事情があるためだ。ある24歳の産婦は4回出産したが、子ども達はみな彼女の元にはいない。

お産をめぐる様々な記述を通して、現地社会における富裕層と貧困層、女性と男性、大人と子どもといった力関係と不平等が浮き彫りになっていく。本書は、家族と性に纏わる最もセンシティブな領域に切り込むことによって、社会と人間の「光と闇」が凝縮された現場を臨場感をもって描いている。

### 近代医療と出産

#### ——「あるべきお産」をめぐる

日本における病院出産は、高度経済成長と共に増加してきた。お産を病院で管理することについての評価は、出産を女性に備わった生理的プロセスと見るか、医学的介入を必要とするプロセスと見るかによって異なっている。

お産を女性の自然の生理とする立場からは、異常の無い/少ないお産まで医療の対象として扱われることによって産婦と児へ余計な負担を与え、「人工難産」や産後うつを生み出しているとする批判が為されている[松岡 2014: 106-107, 133-140]。一方、医療者の側は low risk の場合に限って助産師主導の妊娠・分娩管理を認める判断が趨勢である。日本産科婦人科学会、日本産婦人科医会のガイドラインでは「異常発見のための検査」と「発見された異常に対する適切な対応」が細かに記され、最後まで正常と判断された妊婦のみが医師の介入のない出産を全うすることができる[日本産科婦人科学会・日本産婦人科医会 2014: 259-265]。現代の日本では「お産は安全」という意識が根強いいため、出産においてひとたび「予期せぬ異常」が起きれば医療者や介助者の責任が問われやすい。そうした社会の風潮において、管理の範囲は拡大し厳格化する傾向にあるといえるだろう。

フィリピン、特に本書のクリニックがある地域では、多くのお産が医療の外部で行われるという現状がある。その背景として、まず第一にお金がないと医療にアクセスできない。支払いが数百円

足りないために病院に居ながらにして治療を受けられず命を落とすこともある。さらに、医師や看護師から差別的な対応や乱暴な処置を受けた経験、不満や症状を聞き入れてもらえないことに起因する不信感は、貧しい人びとを病院から遠ざける。

そのため近代医療が行き渡らない間隙において、家庭出産や産婆・伝統的マッサージ師によるお産介助が日常的に行われてきた。こうした状況は、リスクのある出産が必ずしも病院で処置を受けられない問題がある一方、全てのお産を医療の領域に押し込むことによる弊害から自由であるともいえる。

ところで、本書著者の立場は一貫して「自然なお産派」である。彼女は自身の出産についても自宅で生むことを強く希望していた。しかし、著者の赤ちゃんは過産期寸前になっても生まれず、母体には様々な異変が起こることになる。最終的な選択と出産の結末については、詳しくは本書を読んでいただくとして、一連の記事から評者が感じたことは、少なくとも家庭か病院かという二分法で「あるべきお産」を語ることはできないということだ。身体の状態、胎児と出産に対する感覚、住む場所や経済的余裕等の物理的環境は、その時その人固有のものである。そして、お産の結果は誰かと一緒に背負うことはできない。それが、「子どもの命への責任、自分の命の責任は産婦である自分自身にある」(p. 201)と著者の言う意味だと理解した。「あるべきお産」は一般化できず、しかも自分の身に全て引き受ける経験であるからこそ、産婦が心身の状態を共有する場や関係性、環境が整わない時に誰かがすぐに手を貸してくれる状況が必要だ。そうでなければ、たとえ物理的に「贅沢なお産」が可能になったとしても、お産がどんどん孤独になっていくように思える。

#### 「生」を基点に世界を繋げる

最後に、本書が開くエスノグラフィーの可能性について考えてみたい。収録されたエッセイは基本的に一話完結型であり、本書全体を通した「既存研究への批判」「問いに対する答え」といったストーリーは存在しない。そのため読者によっては

散漫な印象を抱いてしまうかもしれない。

では、本書の何に心を打たれるのかと問われれば、評者は「生の葛藤」と答えるだろう。本書には人びとの矛盾する行動や複雑な感情がそのまま描かれている。それは一貫した価値観や行動規範によって説明できない雑多な営みである。文化人類学的な、あるいは地域研究のフィールドワーク経験者の多くは、そうした営みが日常の大部分を占めることを実感しているのではないだろうか。それにもかかわらず、一旦「書く」作業になると説明できない要素はそぎ落とさざるを得ない。だが、ディシプリンに沿った情報の取捨選択と表現が、人びとの生活実態からかけ離れていくのだとしたら、それは何のために誰に対して書いているのだろうかという疑問が湧いてくる。

エスノグラフィーについて文化人類学が展開してきた議論・自己批判の多くは、書く側と書かれる側の非対称性に力点を置いてきた。その応答として例えば清水は、人類学者がホームとフィールドという2つの世界を生きる困難な経験や調査対象との生身の関係を「他者表象」に響かせることによって、両者の固定的構造を切り崩す可能性を示唆している [清水 2003: 67-108]。

一方本書は、テキストとしてのエスノグラフィーのもう1つの極である、読む側と読まれる側の相互作用について、研究者と当事者のみならず多様な読み手を射程に入れた表現の可能性を示している。本書に描かれる「リアリティ」は、読み手である私達の生きる現実と現地の人びとの現実を繋げる力を持っている。何故なら命という切実な問題をめぐる葛藤は、置かれた状況は違っても、どこにでもあるからだ。そのチャンネルを通して「私達」と「彼／彼女ら」の現実が重なる。そのため読み手は2つの世界の間に境界線を引く

ことができず、自身の生のあり方について、違う角度から見直すことを余儀なくされる。

他者の生と繋がり自分の立ち居居が覆される経験は、心地良いとは限らない。他者の生を受け入れることは、自己を解体し更新し続ける不安や痛みを伴うからだ。しかしその作業を怠れば「私達」と「彼ら」の間の境界線が揺らぐことはない。テキストの受け取り手に対してそうした揺らぎの発信源となることは、文化人類学や地域研究といった異文化を対象とする研究の重要な役割の1つといえるのではないだろうか。

近年、ヘイトスピーチに代表されるように、人びとをカテゴライズし、限定された想像力のうちに「彼ら」のイメージを固定化しようとする言説を頻繁に目にする。他者の生と繋がることによって一人一人に経験される揺らぎは、それらの言説に対する静かなしかし確かなカウンターとして力を持ち得る。本書は「他者」について書くことの困難さを改めて突きつけると共に、そのオルタナティブな可能性を示している。

(吉澤あすな)

#### 参考文献

- 公益社団法人日本産科婦人科学会；公益社団法人日本産婦人科医会. 2014. 『産婦人科診療ガイドライン——産科編 2014』 [http://www.jsog.or.jp/activity/pdf/gl\\_sanka\\_2014.pdf](http://www.jsog.or.jp/activity/pdf/gl_sanka_2014.pdf) (最終アクセス：2015年4月28日).
- 松岡悦子. 2014. 『妊娠と出産の人類学——リプロダクションを問直す』 京都：世界思想社.
- 清水 展. 2003. 『噴火のこだま——ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』 福岡：九州大学出版会.